

中学生の英語学習動機を高める要因

～留学生との異文化交流会の効果再検証～

Investigating Factors that Affect Student Motivation to Study English
Through Student Models Created After Intercultural Events

金子 義隆

KANEKO Yoshitaka

Abstract

The purpose of this paper is to find factors in intercultural events that affect the motivation of students to study English. To do so, students of four Adachi public junior high schools were asked to fill out questionnaire surveys immediately after each intercultural event held with international students from Meikai University. 653 junior high school students responded and the results were calculated and analyzed through statistical methods such as regression analysis. One student model was formulated from each of four schools that explains how they were motivated through the events. The comparisons of the four models helped discover two significant factors common among the four models. The most influential factor was the students' desire to be able to speak English better. The second most influential factor was students' interest in English. These models showed similarities to the model produced by Kaneko (2020), thereby reconfirming that the importance of these factors should be taken into serious consideration in the classroom.

キーワード：英語学習動機，中学生，異文化交流，留学生，重回帰分析，説明モデル

1. 異文化交流の意義

本学は、足立区（近藤やよい区長）と教育に関する連携協定を2016年度に締結した。これ以降、足立区教育委員会と連携して小中学校に対して本学の研究・教育資源を生かしたさまざまな英語教育支援をおこなってきた。その一つの目玉として、世界のさまざまな国・地域から来ている本学留学生と足立区の中学生が英語でコミュニケーションをおこなう異文化交流会を毎年実施してきた。2022度は、4回の異文化交流会を区立中学校と実施した。

この異文化交流会をおこなう目的は複数存在する。この事業の第一義的な目的は、中学生の英語学

習動機を高めることである。学習動機を高めることは英語以外の科目においてももちろん欠かせないのであるが、特に英語は「言語」であるがゆえに学習への継続的な取組みがより一層必要とされる。継続的な学習を成立させるには学習への動機づけがより一層大きな意味を持つと考えられる。

中学生の英語学習動機を高めるために、この事業の中で留学生と実際に英語でコミュニケーションすることを通して、中学生に英語でコミュニケーションすることの楽しさを体験してもらうことが重要である。異文化の背景を持つ留学生と英語を通して交流することが楽しいと感じてもらうことである。英語を使う交流が楽しいと感じることは内発的動機づけに通じると考えられる。内発的動機づけとは、

「活動することそれ自体が目的となっており、それ以外に報酬を必要としないような動機づけ」を意味する (Harlow, 1950, 1953)。英語で交流すること自体が楽しいと感じることは内発的に動機づけられている。

内発的動機づけを引き起こす源泉について, Deci & Ryan (1985, 2022) は自己決定理論の中で「有能さ」, 「自律性」, 「関係性」の3つの基本的心理的欲求の存在を規定している。その中でも, White (1959) は「有能さ」に着目し, 「自分が有能である」と感じるために人は行動すると考える。つまり, 内発的動機づけを高めるためには「有能さ」を感じられることが必要である。これに似た概念に「自己効力感」がある (Bandura, 2001)。Banduraによれば, 自己効力感とは, ある物事をやり遂げるための能力を自分が持っているかどうかの自己評価である。自己効力感は常に一定ではなく, 過去の経験によって大きく影響される。

英語学習において, 何度も「できた」「わかった」「通じた」などの「成功体験」を積み重ねることで高い自己効力感を持つことができるのである。この異文化交流事業において, 英語が「通じた」「わかった」という成功体験をたくさん持ってもらうことが重要であり, この「成功体験」の積み重ねが自己の「有能さ」とか「自己効力感」を感じることにつながり, ひいては内発的動機づけへとつながると考えられる。

実際, 日本のような EFL 環境 (英語が外国語であり, 日常生活で英語を使う必要がほぼない環境) では英語を教室以外で使う機会は極めて少ない。このような環境においては, 英語の授業は実際に英語を使うことのできる貴重な機会となる。とはいっても, 公立中学校における英語の授業時数は週に4回しかない。その中で1クラス大抵35人が英語を使って「通じた」, 「わかった」という成功体験を十分に積むためには授業をコミュニケーション活動中心に展開するなど工夫が必要となるだろう。十分に

成功体験を得させることは決して簡単ではないと言える。留学生と英語でコミュニケーションする異文化交流事業は, まさに中学校の普通の授業をサポートすることが狙いである。

また, 英語圏のみならず世界の多様な異文化に対する理解を中学生に深めてもらうことも異文化交流事業の目的の一つである。本学の留学生は, 英語圏よりもむしろ東アジア, 東南アジア, 南アジア, 中央アジアなどの非英語圏出身が多い。教科書などでも比較的紹介されることが少ない国の文化に触れることで, 文化の多様性や世界の広さなどを生徒が知るきっかけにしてもらうためである。そして, 異文化への関心や理解を深めることは英語や外国語への関心につながるものである。

2. 異文化交流事業の概要

足立区と共同で開発し実施している中学校での異文化交流会は毎年4回ないし6回のペースで実施している。2020年度から2023年現在に至るまで3年間は新型コロナウイルスの蔓延による影響で時としてオンライン形式でも開催された。以下に, 2022年度に4校の足立区立中学校で実施された異文化交流会の概要を簡潔に記す。

2.1 A 中学校での取組み

- ①参加者：本学留学生8名と中学1年生約180名, 2年生190名
- ②参加留学生の出身国：アメリカ, 中国, フィリピン, ネパールの計4か国
- ③概要：Zoomを利用したオンライン形式で行った。留学生は3時間目と4時間目の英語の授業に参加した。留学生は一人ずつPCを使い, 中学生はクラス単位で1台のタブレットを使用した。Zoomのブレイクアウトルームを活用して留学生は一人一クラスに入って交流した。留学生は写真などを使って自分自身や自国の文化を

紹介した。また、中学生も自分たちで予め考えていた質問をしたり、留学生からの質問に答えたりした。中学生も留学生も英語を使ってのコミュニケーションを楽しむことができた。

2.2 B 中学校での取組み

- ①参加者：本学留学生 8 名と中学 2 年生約 160 名
- ②参加留学生の出身国：アメリカ，韓国，中国，ドイツ，ドミニカ共和国，フィリピンの計 6 か国
- ③概要：留学生 8 名は，対面形式で 2 時間目から 6 時間目の英語の授業に参加した。留学生は一人ずつ中学生のグループに加わりパワーポイントや写真を使って自分と自国の紹介をした。中学生も自分たちで予め考えていた質問をしたり，留学生からの質問に答えたりした。

2.3 C 中学校での取組み

- ①参加者：本学留学生 8 名と中学 2 年生約 60 名，中学 3 年生 70 名
- ②参加留学生の出身国：韓国，中国，ドイツ，ドミニカ共和国，フィリピン，モンゴルの計 6 か国
- ③概要：留学生 8 名は，2 時間目から 4 時間目の英語の授業に対面で参加した。留学生は一人ずつ中学生のグループに加わり持参してきた写真を使って自分と自国の紹介（例：ドイツの食文化やモンゴルの大自然）をした。中学生も自分たちで予め考えていた質問（例：Which is older, Ginkakuji or Horyuji?）をした。留学生にとっては難しい質問も多かったが，一生懸命考えて答えていた。

2.4 D 中学校での取組み

- ①参加者：本学留学生 7 名と中学 2 年生約 100 名
- ②参加留学生の出身国：アメリカ，中国，ドイツ，ドミニカ共和国，フィリピンの計 5 か国
- ③概要：留学生 7 名は，2 時間目から 4 時間目の英語の授業に対面で参加した。まず，留学生は

一人ずつ中学生のグループに加わり持参してきた写真を使って自分と自国の紹介（例：アメリカの食文化や行事，フィリピンの有名なレストラン）をした。その後，中学生も自分たちで予め用意していた発表（例：和菓子やお気に入りのアニメ）をした。

3. 過去の異文化交流事業の効果検証

留学生との交流を通じた中学生の英語学習動機に関する研究例は極めて少ない。その中で，金子（2020）が行った研究では，2019 年度に行われた計 5 回異文化交流会後に行われたアンケート調査の結果（694 人回答）を統計解析を用いて分析し，英語学習動機を向上させた説明モデルを提示した。「英語学習をさらに頑張りたい」と回答した生徒は，「よく当てはまる」と「少し当てはまる」の回答を合わせて計 82.9% であった。異文化交流会は生徒たちにとって年に何回も体験できるものと違い，1 年に 1 度あるかないかの「行事」的なものである。この交流会を通して，「英語が楽しい」とか「異文化はおもしろい」とか「英語は必要」，「もっと話ができるようになりたい」と感じたとしても，その時限りで，その後が続かないのであれば，効果が高いとは言えない。しかし，この回答結果はこの事業が一過性のもので終わるのではなく，生徒の日常の英語学習につながる可能性のあるものであることを示した。

さらに，金子は「英語学習をさらに頑張りたい」と回答した生徒の説明モデルを探求した。生徒のやる気向上は異文化交流事業の望ましい波及効果だからである。まず質問ごとの相関分析をおこなった。これによって，質問ごとの関連を調べた。また，英語学習へのやる気に関する質問との関連も調べた。その結果，全ての質問間に，程度の差はあれ相関があることが分かった。英語学習へのやる気に関する質問と最も強い相関 ($r = .793$) があつたのは，

「もっと英語を話せるようになりたい」であった。このことから、「英語をもっと話せるようになりたい」と強く思うほど、英語学習へのやる気をますます強めた」と分析した。しかし、「英語をもっと話せるようになりたい」思いと「英語学習へのやる気」に関連があることは分かっても、この結果だけではどちらが「原因」でどちらが「結果」なのかの因果関係を知ることはできないため、重回帰分析をステップワイズ法を用いて「英語学習へのやる気の向上」との因果関係の分析を行い動機づけの説明モデルを探索した。

金子（2020）が示したモデルによれば、質問「英語をもっと話せるようになりたい」が最も影響力が強く全体約3分の2の影響があり（ t 値＝20.871）、次いで質問「英語の交流は楽しかった」、質問「英語好き」、質問「また交流会をしたい」、質問「英語得意」の順であった。つまり、「英語をもっと話せるようになりたい」と思ったかどうかはまずとても重要で、「交流を楽しんだ」ことやそもそも「英語好き」であること、そして「また交流会をしたい」と思ったことや「英語が得意」である要素が質問「英語学習へのやる気」に影響を与えていたことが分かった。こうして作成されたモデル図が図1である。この結果、さまざまな要因が「やる気」に影響を与えていることが分かった。その中でも、「英語をもっと話せるようになりたい」という要因がかなり強力な影響力を持っていることが分かった。

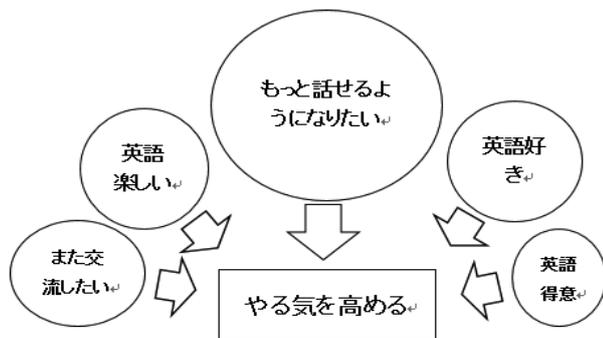


図1 異文化交流会を通して英語学習動機を高めた生徒の説明モデル（金子2020）

4. 2022年度の異文化交流会の効果検証

4.1 目的

本研究の目的は、以下の2つである。

目的1：2022年度内に行われた区立中学校4校での異文化交流会を通して、各校の英語学習動機を高めた生徒の説明モデルを作成することである。

目的2：新たに得られた2022年モデルと金子が提示した2020年モデルと比較検証し、結果を分析してすることである。

4.2 参加者

上述の異文化交流会に参加して、事後アンケートに回答してくれた4校の中学生653人である。学校によって参加した生徒の学年にはばらつきがあるが1年生と2年生であった。参加した人数も各校によりばらつきがある（上述の各校の参加者数を参照）。アンケートの対象は交流会参加者全員であるが、アンケート実施のタイミングは各校でばらつきがあった。交流会の当日に実施した場合と交流会実施の数日後に実施する場合とあった。後日にアンケートを実施した場合、交流会に参加した生徒が欠席している場合があったと考えられる。

4.3 方法

異文化交流会実施後に、参加者に事後アンケート（資料1参照）を実施した。アンケートはgoogle formsを利用して作成された。生徒は一人ひとりに与えられているタブレットを利用してアンケートの二次元コードを読み取って回答した。5件法で9個の質問をした。生徒は自分で当てはまる数字を丸で囲む方式をとった。最初の2つの質問は生徒の英語に対する好意度・得意度を尋ねる質問であった。その後の7つの質問は、異文化交流会に関連するものであった。最初の2つの質問の意図は、生徒の持つ

通常の英語に対する意識が異文化交流会での取組みにどのように作用するのかを調査するためであった。統計処理は、SPSS 25 ヴァージョンを使用して行われた。

5. 結果及び考察

ここからは、2022年度の異文化交流会を通して英語学習動機を高めた生徒の説明モデルを4校それぞれ順に提示する。まず、A校から得られたアンケートデータを使って行った。質問8「英語学習をさらに頑張りたい」と他の8つの質問との因果関係を突き止めるために、金子(2020)の手法に倣って、質問8「英語学習をさらに頑張りたい」を従属変数とし、他の8つの質問を独立変数として重回帰分析をステップワイズ法を用いておこなった。これは、質問8に影響を与える要因を他の質問から統計的に選び出しながら、「最も妥当性の高いモデルを作る」ためである(石川, 2010, p.118)。表1は、重回帰分析をおこなった結果、それぞれのモデルの説明度を示している。モデルが計3つ作成できた。その中でモデル3が最も良く、全体の結果の約59% (調整済みR2乗値: 0.588) を説明できること

を示している。

表1 モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.743 ^a	0.552	0.550	0.589
2	.762 ^b	0.580	0.578	0.571
3	.769 ^c	0.592	0.588	0.564

a. 予測値: (定数), Q7。

b. 予測値: (定数), Q7, Q1。

c. 予測値: (定数), Q7, Q1, Q4。

表2によれば、モデル3の「有意確率」は1%未満(有意確率=0.000)であり、モデルの当てはまりは非常に高い。3つの要因(質問7, 質問1, 質問4,)が質問8の「英語学習動機」に影響を与えていることが分かる。

そして、モデル3に対する各変数の影響の度合いは「t値」から説明できる。表3のモデル3によれば、質問7「英語をもっと話せるようになりたい」が最も影響力が強く(t値=14.014)、次いで質問1「英語が好き」(t値=4.166)、質問4「世界にはいろいろな文化があることを実感した」(t値=2.884)の順である。つまり、「英語をもっと話せるようになりたい」と思ったかどうか「英語学習動機」を

表2 分散分析^a

モデル		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1	回帰	130.561	1	130.561	376.278	.000 ^b
	残差	106.176	306	0.347		
	合計	236.737	307			
2	回帰	137.406	2	68.703	210.956	.000 ^c
	残差	99.331	305	0.326		
	合計	236.737	307			
3	回帰	140.052	3	46.684	146.785	.000 ^d
	残差	96.685	304	0.318		
	合計	236.737	307			

a. 従属変数 Q8

b. 予測値: (定数), Q7。

c. 予測値: (定数), Q7, Q1。

d. 予測値: (定数), Q7, Q1, Q4。

表3 係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.832	0.180		4.627	0.000
	Q7	0.766	0.039	0.743	19.398	0.000
2	(定数)	0.749	0.175		4.277	0.000
	Q7	0.678	0.043	0.657	15.840	0.000
	Q1	0.146	0.032	0.190	4.585	0.000
3	(定数)	0.366	0.218		1.677	0.095
	Q7	0.632	0.045	0.613	14.014	0.000
	Q1	0.133	0.032	0.173	4.166	0.000
	Q4	0.139	0.048	0.119	2.884	0.004

a. 従属変数 Q8

高めるにはとても重要であることが分かった。また、そもそも「英語が好き」であることも重要である。英語が好きかどうかはこの異文化交流会に前向きな気持ちで臨むか、それとも後ろ向きな気持ちで臨むかに影響を与えていると考えられる。そして、「世界にはいろいろな文化があることを実感」することも影響力があることが分かった。

次に、B校の分析をA校と同様に行い、表4の結果が得られた。表4によれば、モデルは3つ作成され、その中でモデル3が最も良く、全体の約

63%（調整済み R2 乗値：0.626）を説明できることを示している。

表4 モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.768 ^a	0.590	0.588	0.623
2	.785 ^b	0.617	0.612	0.605
3	.796 ^c	0.633	0.626	0.594

a. 予測値：(定数), Q7。

b. 予測値：(定数), Q7, Q1。

c. 予測値：(定数), Q7, Q1, Q4。

表5 分散分析^a

モデル		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1	回帰	81.253	1	81.253	209.072	.000 ^b
	残差	56.352	145	0.389		
	合計	137.605	146			
2	回帰	84.879	2	42.439	115.905	.000 ^c
	残差	52.727	144	0.366		
	合計	137.605	146			
3	回帰	87.146	3	29.049	82.323	.000 ^d
	残差	50.459	143	0.353		
	合計	137.605	146			

a. 従属変数 Q8

b. 予測値：(定数), Q7。

c. 予測値：(定数), Q7, Q1。

d. 予測値：(定数), Q7, Q1, Q4。

表6 係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.943	0.239		3.948	0.000
	Q7	0.762	0.053	0.768	14.459	0.000
2	(定数)	0.891	0.232		3.838	0.000
	Q7	0.637	0.065	0.642	9.821	0.000
	Q1	0.170	0.054	0.206	3.147	0.002
3	(定数)	0.144	0.373		0.386	0.700
	Q7	0.601	0.065	0.606	9.217	0.000
	Q1	0.145	0.054	0.175	2.684	0.008
	Q4	0.213	0.084	0.142	2.535	0.012

a. 従属変数 Q8

表5によれば、モデル3の「有意確率」は1%未満（有意確率 = 0.000）であり、モデルの当てはまりは非常に高い。上述のA校モデルと同じ3つの要因（質問7、質問1、質問4、）が質問8の「英語学習動機」に影響を与えていることが分かった。

そして、モデル3に対する各変数の影響の度合いは「t値」から説明できる。表6のモデル3によれば、質問7「英語をもっと話せるようになりたい」が最も影響力が強く（t値 = 9.217）、次いで質問1「英語が好き」（t値 = 2.684）、質問4「世界にはいろいろな文化があることを実感した」（t値 = 2.535）の順である。つまり、「英語をもっと話せるようになりたい」と思ったかどうか「英語学習動機」を高めるには一番強い影響力を持っているがA校と同様に確認できた。また、「英語が好き」であることもやはり影響力があり、「世界にはいろいろな文化があることを実感」することも影響力があることが分かった。これもA校のモデルと同様であった。

続いて、C校の分析をA校とB校同様のやり方で行い、表7の結果が得られた。表7によればモデルは4つ作成された。その中でモデル4が最も良く、全体の約56%（調整済みR2乗値：0.555）を説明できることを示している。

表7 モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.644 ^a	0.415	0.410	0.648
2	.711 ^b	0.505	0.496	0.599
3	.742 ^c	0.551	0.539	0.573
4	.755 ^d	0.570	0.555	0.563

a. 予測値：（定数）、Q7。

b. 予測値：（定数）、Q7、Q1。

c. 予測値：（定数）、Q7、Q1、Q4。

d. 予測値：（定数）、Q7、Q1、Q4、Q5。

表8によれば、モデル4の「有意確率」は1%未満（有意確率 = 0.000）であり、モデルの当てはまりは非常に高い。上述のA校モデルとB校モデルと違って4つの要因（質問7、質問1、質問4、質問5）が質問8の「英語学習動機」に影響を与えていることが分かる。

そして、モデル3に対する各変数の影響の度合いは「t値」から説明できる。表9のモデル4によれば、質問7「英語をもっと話せるようになりたい」が最も影響力が強く（t値 = 4.629）、次いで質問1「英語が好き」（t値 = 4.002）、質問4「世界にはいろいろな文化があることを実感した」（t値 = 2.464）、そして質問5「英語は必要だと感じた」（t値 = 2.257）の順である。「英語をもっと話せるようにな

表8 分散分析^a

モデル		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1	回帰	34.254	1	34.254	81.598	.000 ^b
	残差	48.276	115	0.420		
	合計	82.530	116			
2	回帰	41.675	2	20.837	58.143	.000 ^c
	残差	40.855	114	0.358		
	合計	82.530	116			
3	回帰	45.448	3	15.149	46.165	.000 ^d
	残差	37.082	113	0.328		
	合計	82.530	116			
4	回帰	47.061	4	11.765	37.151	.000 ^e
	残差	35.469	112	0.317		
	合計	82.530	116			

a. 従属変数 Q8

b. 予測値：(定数), Q7。

c. 予測値：(定数), Q7, Q1。

d. 予測値：(定数), Q7, Q1, Q4。

e. 予測値：(定数), Q7, Q1, Q4, Q5。

表9 係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	1.248	0.343		3.636	0.000
	Q7	0.675	0.075	0.644	9.033	0.000
2	(定数)	1.189	0.317		3.747	0.000
	Q7	0.526	0.076	0.503	6.895	0.000
	Q1	0.220	0.048	0.332	4.550	0.000
3	(定数)	0.374	0.387		0.966	0.336
	Q7	0.425	0.079	0.406	5.391	0.000
	Q1	0.188	0.047	0.284	3.986	0.000
	Q4	0.309	0.091	0.248	3.391	0.001
4	(定数)	-0.183	0.453		-0.404	0.687
	Q7	0.374	0.081	0.357	4.629	0.000
	Q1	0.186	0.046	0.280	4.002	0.000
	Q4	0.235	0.095	0.188	2.464	0.015
	Q5	0.237	0.105	0.169	2.257	0.026

a. 従属変数 Q8

りたい」と思ったかどうかが一番強い影響力を持っていることと「英語が好き」であること、「世界に

はいろいろな文化があることを実感」することも A 校モデルや B 校モデルと同様に影響力があるこ

とが分かった。しかし、その2つのモデルと違う点は質問5「英語の必要性」がここでは影響を与えていることである。

最後に、D校の分析をこれまでと同様のやり方で行い、表10の結果が得られた。表10によれば、モデルは3つ作成された。その中でモデル3が最も良く、全体の約74%（調整済みR2乗値：0.736）を説明できることを示している。

表10 モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.800 ^a	0.640	0.636	0.636
2	.840 ^b	0.706	0.699	0.579
3	.863 ^c	0.745	0.736	0.542

a. 予測値：(定数), Q7。

b. 予測値：(定数), Q7, Q1。

c. 予測値：(定数), Q7, Q1, Q9。

表11によれば、モデル3の「有意確率」は1%未満（有意確率 = 0.000）であり、モデルの当てはまりは非常に高い。3つの要因（質問7, 質問1, 質問9）が質問8の「英語学習動機」に影響を与えていることが分かった。

表12のモデル3によれば、質問7「英語をもっ

と話せるようになりたい」が最も影響力が強く（t値 = 7.012）、次いで質問1「英語が好き」（t値 = 3.623）、そして質問9「交流会をまたやってほしい」（t値 = 3.449）の順である。「英語をもっと話せるようになりたい」と思ったかどうかが一番強い影響力を持っていることと「英語が好き」であることが上述した3校のモデルと同様に影響力があることが分かった。しかし、その3つのモデルと違う点は「また交流会したい」という変数がここでは影響を与えていることである。

今回の研究目的の1つ目である4校のモデルの比較を行って明らかになったことが幾つかある。まず4つのモデル全てに共通して分かったことであるが、従属変数である質問8「英語学習をさらに頑張りたい」に最も強い影響力を持つ変数は質問7「英語をもっと話せるようになりたい」であった。「英語をもっと話せるようになりたい」と思うことは動機づけにおいて重要なようである。

そして、もう一つ全モデルで共通していた点は、「英語好き」が2番目に影響力のある変数であったことである。「英語好き」とは生徒の属性であり、異文化交流会を通してそうなったというより以前からそうであったと言える。つまり、交流会に臨む前

表11 分散分析^a

モデル		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1	回帰	56.921	1	56.921	140.554	.000 ^b
	残差	31.993	79	0.405		
	合計	88.914	80			
2	回帰	62.787	2	31.394	93.725	.000 ^c
	残差	26.127	78	0.335		
	合計	88.914	80			
3	回帰	66.283	3	22.094	75.175	.000 ^d
	残差	22.631	77	0.294		
	合計	88.914	80			

a. 従属変数 Q8

b. 予測値：(定数), Q7。

c. 予測値：(定数), Q7, Q1。

d. 予測値：(定数), Q7, Q1, Q9。

表 12 係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.201	0.341		0.587	0.559
	Q7	0.889	0.075	0.800	11.856	0.000
2	(定数)	0.154	0.311		0.497	0.621
	Q7	0.708	0.081	0.637	8.774	0.000
	Q1	0.272	0.065	0.304	4.185	0.000
3	(定数)	-0.457	0.341		-1.342	0.184
	Q7	0.585	0.083	0.527	7.012	0.000
	Q1	0.225	0.062	0.252	3.623	0.001
	Q9	0.294	0.085	0.245	3.449	0.001

a. 従属変数 Q8

の英語に対する肯定的な意識である。この「英語好き」であるという意識が日ごろの英語学習に対してもそうかもしれないが、交流会を経た後も英語学習動機に強く作用しているようである。

次に、D校モデル以外の3つのモデルで共通していた点は、第3番目に影響を与えていた変数が質問4「世界にはいろいろな文化があることを実感した」であった。言語を学ぶ上で文化への興味関心は非常に重要である。なぜなら、言語はそれが話されている文化に常に影響を受けながら変化したり、発展したりしていくもので、文化とは切り離すことのできないほどの存在だからである。その文化に対して興味関心まではいかないとしても、少なくとも「気づき」を持つことが交流会を通してできたようである。そして、異文化への気づきが「英語学習動機」につながるということが示唆された。

相違点に関してはあまり大きな影響を与えているとは言えないが、2つ挙げることができる。1つ目は、C校モデルのみ「英語学習動機」に与える変数が4つ確認できたのだが、一番影響力の少ない4つ目の変数が「英語の必要性」であった。さまざまな異文化背景を持つ人々とコミュニケーションする異文化交流会を通して英語の必要性を実感できたようだが、C校での生徒においてこの意識が英語学習動

機に影響を与えるようである。

違いの2つ目であるが、D校モデルのみ3番目に影響力のある変数として「また交流会をしたい」が確認できた。このように感じる理由をはっきりとは分からない。しかし、考えられる理由としては、このように感じるためには交流会がとても肯定的な体験となったからだろう。質問3「英語での交流は楽しかった」や質問6「うまくコミュニケーションできた」という変数はモデルに入っていない。つまり、英語の交流が楽しかったとは言い切れないし、うまくコミュニケーションがとれたとも言えないが、それでもさまざまな異文化背景を持つ大学生の留学生と話をする交流会が楽しかったのかもしれない。あるいは、今回の交流会ではもしかしたらうまくコミュニケーションがとれなかったかもしれないが次はもっとうまくコミュニケーションしてみたい。だから、リベンジの機会としてまたやってほしいと思ったかもしれない。

さらに本研究の2つ目である金子2020モデルとの比較を行った。すると、4校全てのモデルが金子2020モデルと似通っている点があるが、全く同じではないことが分かった。もう少し詳しく見てみると、英語学習動機に最も影響力のある変数は「英語をもっと話せるようになりたい」で金子2020モデ

ルにおいても4校のモデルにおいても共通していた。2020モデルに対しては、全体の約3分の2の影響力があつた。この「英語をもっと話せるようになりたい」という思いを生徒が抱くことが英語学習動機にいかにか重要かが今回の研究によっても追認されることになった。

2020モデルでは2番目に強い変数は「英語の交流は楽しかった」であつたが、今回の4校のモデルには確認できなかった。しかし、3番目に影響力のある変数「英語好き」は、既に上述したように4校全てのモデルで2番目の影響力を示した。英語好きであることが英語学習動機につながることを本研究で再確認された。

6. 結論

本研究の目的の1つ目は、2022年度の4校の各モデルを構築することであつた。交流会後の生徒のアンケート結果を重回帰分析して4つのモデルを作成した。比較した結果、英語学習動機に対して最も強い影響力を持つ変数は「英語をもっと話せるようになりたい」という思いであつた。「英語をもっと話せるようになりたい」と思うことは動機づけにおいて重要なようである。「理想の第2言語自己理論」(Dornyei, 2009; Dornyei & Ushioda, 2011)によれば、「英語を話せている自分に将来なりたい・そんな自分に近づきたい」という気持ちが強いほど、英語学習へのやる気は強まると言う。「英語を話せる自分」になることがどれだけ大切なことか、もしそうなれなかった場合はどうなってしまうのかなどをいかに強くイメージすることがカギと言えるのではないだろうか。

そして、「英語好き」が全4校モデルにおいて2番目に影響力のある変数であつたことから、日ごろの英語学習に対しても、交流会を経た後も英語学習動機に強く作用しているようである。「英語好き」とはある種の内発的動機であり、外発的動機に比べ

てより主体的であるとされている (Deci & Ryan, 1985)。「好きこそものの上手なれ」という言葉があるように、英語を好きになることはまず大きな初めの一歩と言えるだろう。

本研究の2つ目の目的は、金子2020モデルとの比較である。その結果、4校全てのモデルで金子2020モデルと似通っている点を確認した。それは、英語学習動機に最も影響力のある変数は「英語をもっと話せるようになりたい」という思いであつた。この「英語をもっと話せるようになりたい」という思いが英語学習動機において大きな影響を与えるのであるから、このような思いになるような仕掛けの開発が今後非常に大切だろう。

2020モデルでは2番目に強い変数は「英語の交流は楽しかった」であつたが、今回の4校のモデルには確認できなかった。しかし、3番目に影響力のある変数「英語好き」は、既に上述したように4校全てのモデルで2番目の影響力を示した。英語好きであることが英語学習動機につながることを本研究で再確認された。

異文化交流会を実施している例は少ない。中学生に異文化の背景を持つ留学生等と英語でコミュニケーションをする機会は非常に貴重であるため、全国的にこのような取組みが広がることを期待したい。そして、交流会の結果をさらに深く分析できるような環境が整えられると望ましい。足立区との共同開発した異文化交流会は近年内容がマンネリ化していることは否めない。今後は内容に関しても違いプログラムを開発するなどの取組みは必要であろう。また、本研究で追認された「もっと英語を話せるようになりたい」思いをどうやって醸成していくかも大きな課題である。同じ交流会を通して英語を話せるようになりたいと思う生徒もいれば、そうではない生徒も存在した。なぜそう思い、思わないのか、その違いを生み出す要因は何かをはっきりさせることができれば、効果的なプログラムを組むことに大いに役立つであろう。そのような改善を積み

重ねながら、より効果的な交流会を実施していけることを期待する。

引用文献

- Bandura, A. (2001). Social cognitive theory: An agentic perspective. *Annual Review of Psychology*, 52, 1-26.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York, NY: Plenum Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2002). *Handbook of self-determination theory*. Rocher, NY: University of Rocher Press.
- Dornyei, Z. (2009). The L2 Motivational self system. In Z. Dornyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language, identity and the L2 self* (pp. 9-42). NY: Multilingual Matters.
- Dornyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow: Longman.
- Graham, S. (1994). Classroom motivation from an attributional perspective. In O'Neil, H. F. Jr., & Drillings, M. (Eds.), *Motivation: Theory and research* (pp. 31-48). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum
- Harlow, H. F. (1950). Learning and satiation of response in intrinsically motivated complex puzzle performance by monkeys. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 43 (pp. 493-508).
- Harlow, H. F. (1953). Mice, Monkeys, Men, and motives. *Psychological Review*, 60, (pp. 23-32).
- White, R. W. (1959). Motivation Reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, 66 (pp. 297-333).
- 石川 有香. (2010). 「第5章 回帰分析：データから説明モデルを作る」『言語研究のための統計入門』東京：くろしお出版
- 金子 義隆. (2020). 「中学校異文化交流の効果検証」『明海大学教職課程センター研究紀要』第3号, 13-24.

資料1 異文化交流会事後アンケート

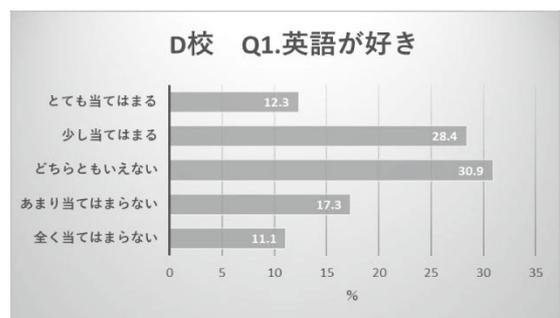
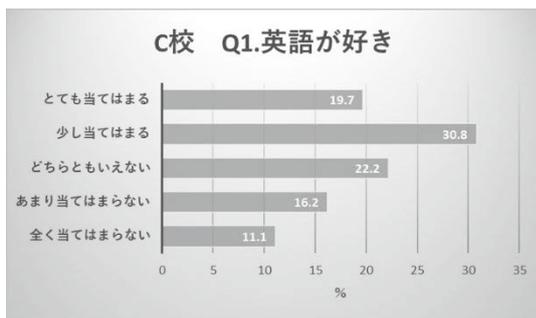
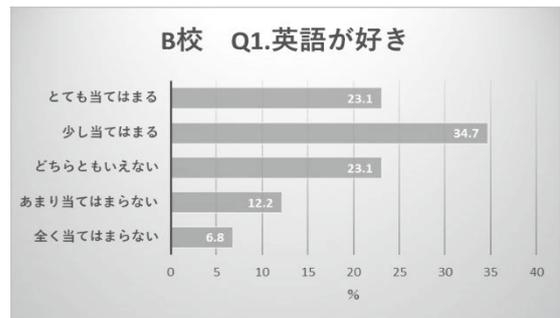
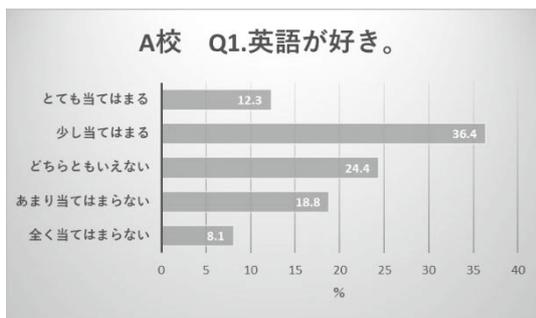
明海大学の留学生との交流学習は楽しかったですか。今後の参考にしたいので、以下の質問に簡単に教えてください。当てはまる回答の数字に○をしてください。

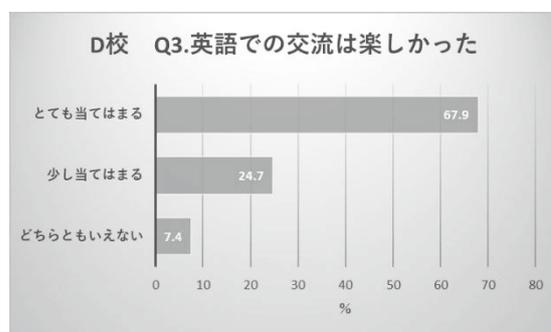
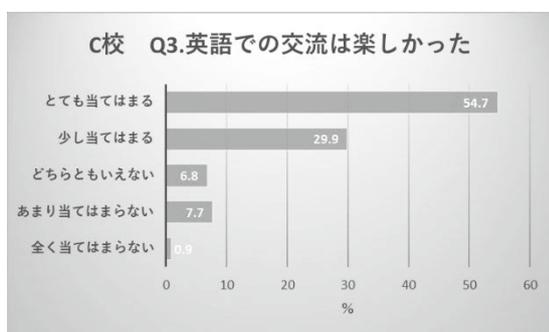
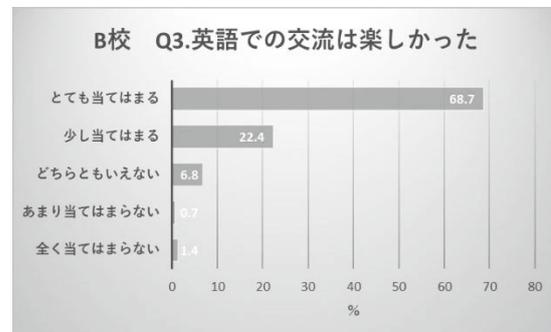
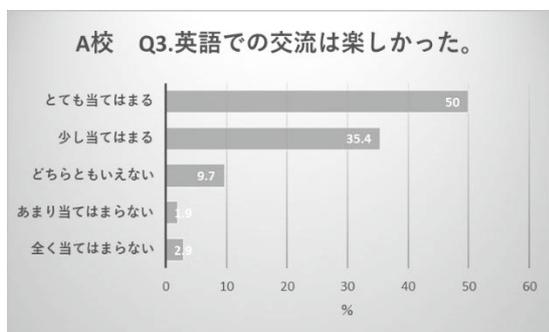
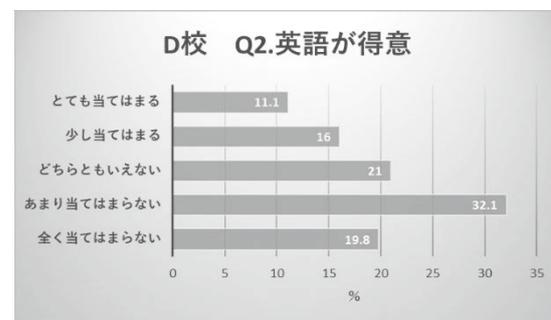
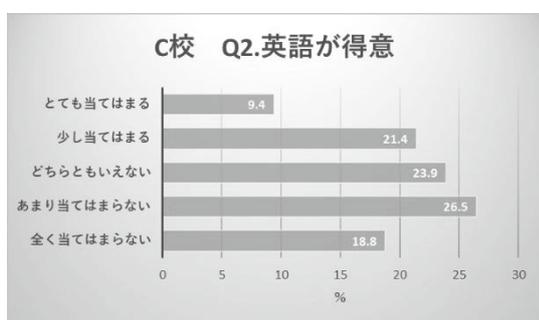
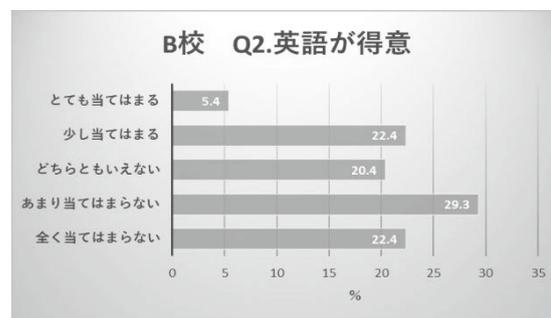
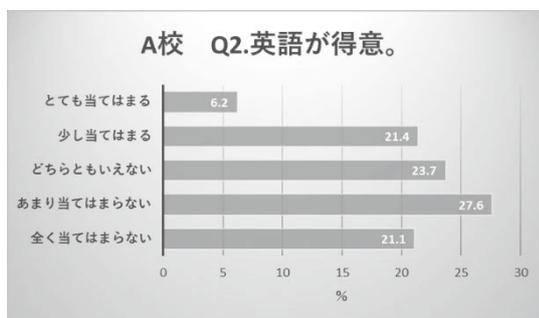
- とても当てはまる (5)
- 少し当てはまる (4)
- どちらとも言えない (3)
- あまり当てはまらない (2)
- 全く当てはまらない (1)

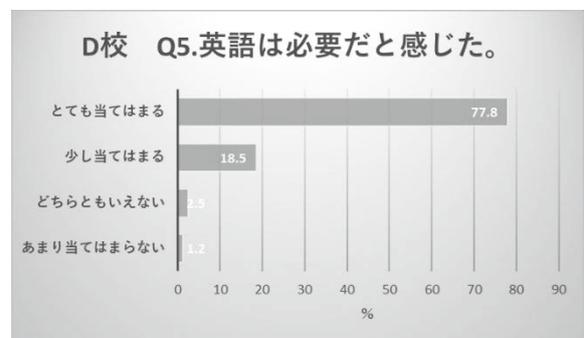
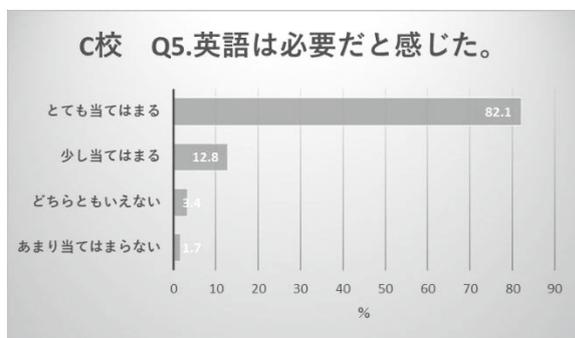
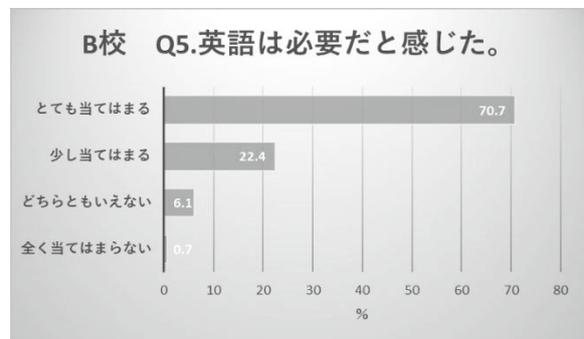
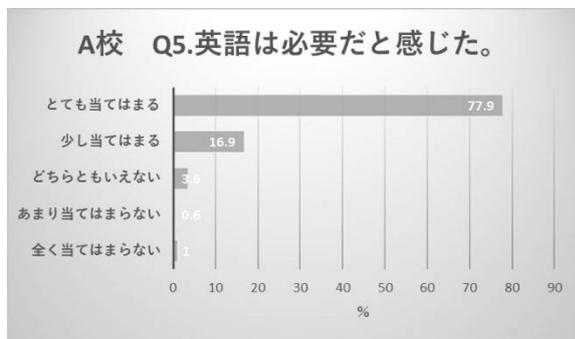
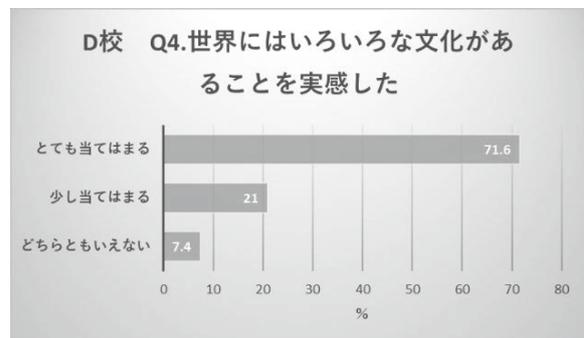
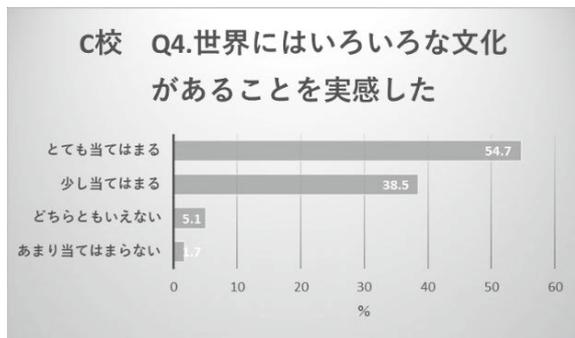
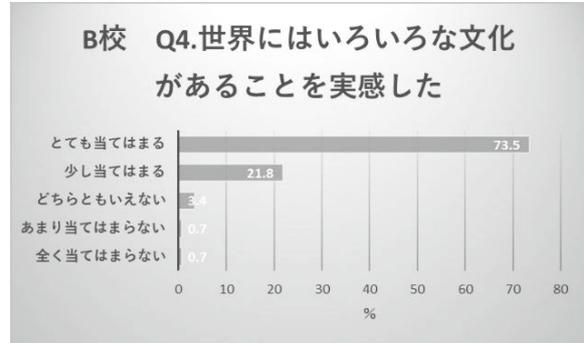
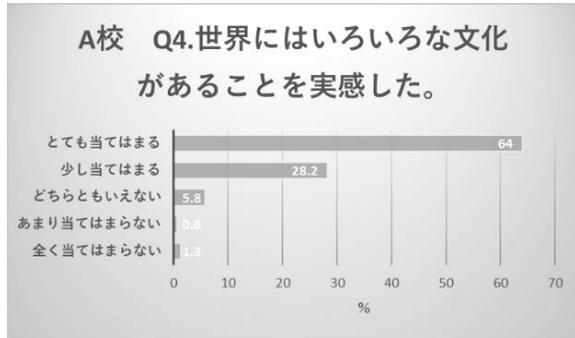
当てはまる学年に○をしてください。(1年生・2年生・3年生)

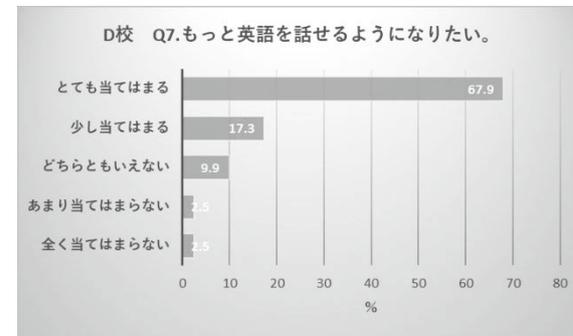
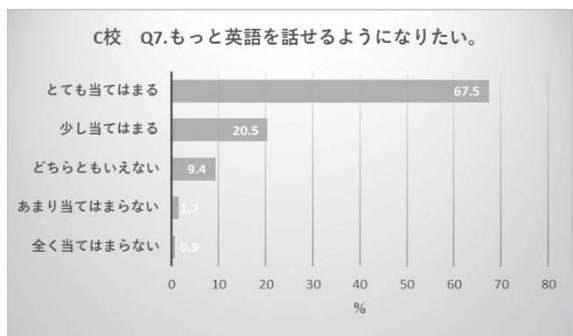
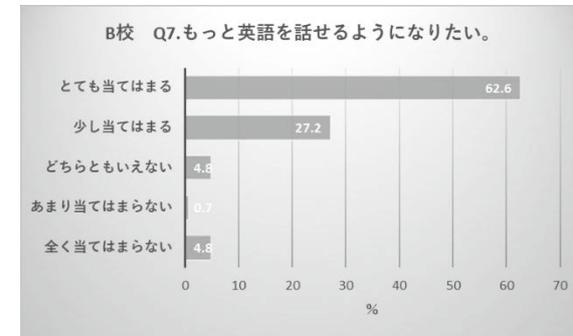
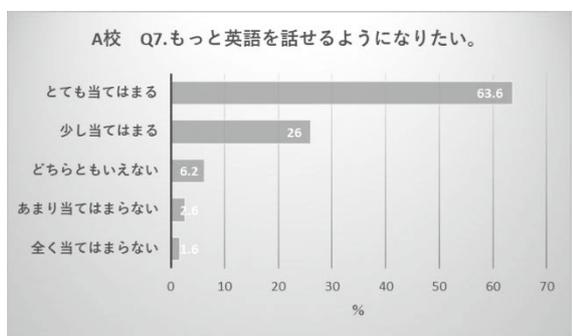
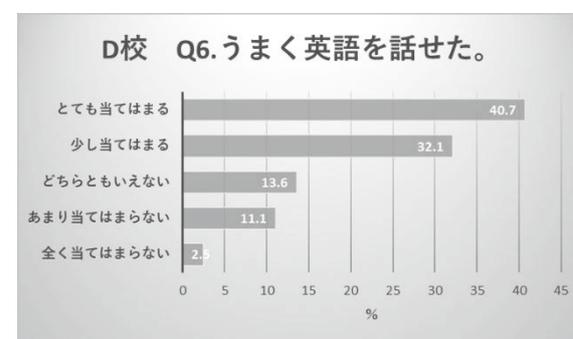
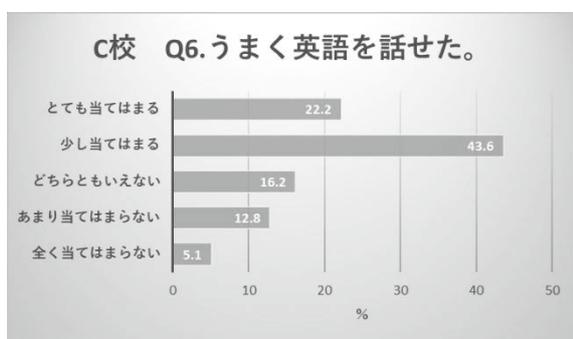
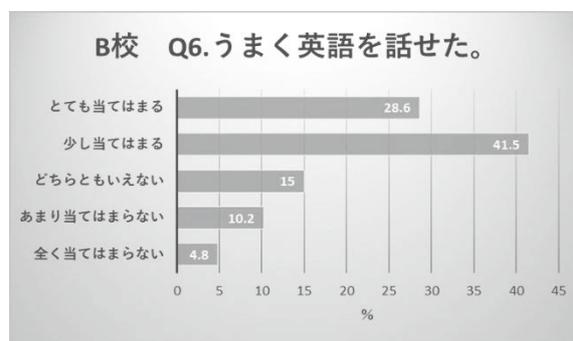
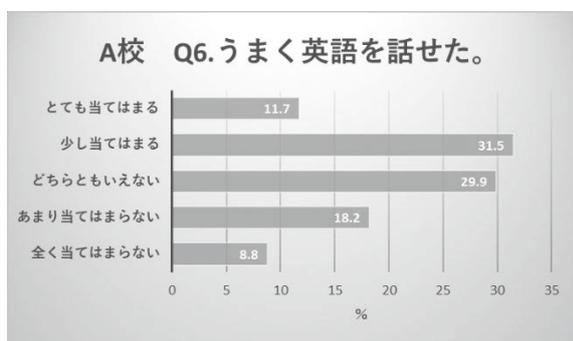
1	英語は好きである。	5	4	3	2	1
2	英語は得意である。	5	4	3	2	1
3	今回の交流学習で留学生と英語でコミュニケーションをするのは楽しかった。	5	4	3	2	1
4	世界にはいろいろな文化があることを実感できた。	5	4	3	2	1
5	世界のいろいろな国の人と交流するには英語が必要だと感じた。	5	4	3	2	1
6	留学生と英語でうまくコミュニケーションをとれた。	5	4	3	2	1
7	もっと英語を話せるようになりたいと思った。	5	4	3	2	1
8	英語学習をさらに頑張る気になった。	5	4	3	2	1
9	このような交流学習をまたやってほしい。	5	4	3	2	1

資料2 事後アンケート質問1～9の4校統計比較表









中学生の英語学習動機を高める要因

